

がん化学療法レジメン管理マニュアル

濱 敏弘 監修

青山 剛, 東 加奈子, 川上和宜, 宮田広樹 編

＜書評者＞ 本山清美 (静岡県立静岡がんセンター・
がん看護専門看護師)

がん化学療法を安全に実施していくためには、医療者と患者がチームとなって治療の管理をしていくことが必要である。本書は、がん化学療法に携わる薬剤師により執筆されたものであり、薬学的な視点や介入を重視してまとめられた1冊である。

冒頭にある監修の序には、「抗がん剤治療のセーフティマネジャーである薬剤師が、処方監査時に確認すべきこと、抗がん剤調製時に注意すべきこと、投与開始時に確認すること、副作用の評価と対策など、抗がん剤治療の安全を担保するために薬剤師の視点からレジメンを解説した書籍である」と書かれてある。その言葉通り、どの章にも薬剤師としての視点が随所に盛り込まれており、簡潔な説明でありながらもその根拠となる部分が記載されているため、知識として持つべき必要性を実感し、納得しながら読むことができる。

第1章では、抗がん剤の相互作用が書かれており、薬物代謝およびトランスポーターの活性変動、吸収過程による物理化学的要因に分けて解説されている。相互作用という理解が難しいと敬遠され

る部分ではあるが、非常にわかりやすく解説されているため、抗がん剤との併用禁忌や注意すべき薬剤がなぜ出てくるのかを理解しやすくなっている。

第2章以降は、疾患別(乳がん、肺がん、大腸がん、胃がん、婦人科がん、腎がん、血液がん)に代表的なレジメンを計43挙げて解説されている。レジメン内容や処方監査のポイント、副作用マネジメント、薬学的ケアの実践に分かれており、各項目でポイントがわかりやすく説明されている。

がん化学療法を安全に実施するためには、治療開始前からのリスクマネジメントが重要であり、その役割を担うのはオーダーを出す医師だけではなく、治療に携わるすべての医療者がそれぞれの役割として責任を持ち管理していることが必要である。

処方監査をするのは薬剤師であるが、入院での内服治療や点滴治療の場合、最終投与者は看護師である。看護師は投与者としての責任を持ち、治療開始前から治療内容の確認やリスクアセスメント、副作用管理などを行う役割を担っている。その管理が不十分であれ

ば、大きな事故が生じることを頭に入れておかなければならない。そういった危機意識を強く持ちながら、本書に書かれてある内容を読むことによって、実際の臨床場面で生かせる知識となる。

また、本書は患者指導にそのまま活用できる内容が多く含まれている。安全な治療という部分と、患者が副作用を最小限にして、できるだけ安楽に治療を受けて生活していくための支援に結びつく内容が記載されている。薬学的ケアの実践には、事例を通して薬剤師の役割を明確にした内容が記載されているが、これらは治療に携わるすべての職種が認識しておかなければならない内容であり、それぞれの役割の中で実践すべき内容も含まれている。

本書は、がん化学療法に関する知識を得るという目的にとどまらず、自分の専門職としての役割を再認識して、他の職種と連携を取りながら実践の質を上げることにもつなげられる本である。また、治療を受ける患者やその家族にとっても、安全に治療を受けるために必要な知識を得ることができる有用な本である。多くの方々に読まれることを期待したい1冊である。

●B6 変 頁 368 2012 年
定価 3,990 円
(本体 3,800 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-01637-7]
医学書院 刊